

〈資料・情報〉

グローバルな環境における幼児の学びへのアプローチ ーハーバード大学のチルドレンズセンターでのインタビューからー

中島 千恵

質の高い保育について考える参考資料としてアメリカのハーバード大学キャンパス内にある保育施設の実践について報告する。同センターでは児童の自己肯定感と自信を高める実践に主眼を置き、様々な保育・教育思想を統合して個々の児童のニーズに合わせたカリキュラムを提供し、基準に基づいたアセスメントや観察を通して児童のポートフォリオを作成している。また児童の成功に関わる全体的基盤となる文化的背景がセンターの環境によって失われてはならないと考えられている。

キーワード：保育の質、トランジション、アセスメント、ポートフォリオ、ハーバード大学

はじめに

2012年1月にOECDのStarting StrongⅢが出版され、保育の質を高め、また質の高い保育を保障する仕組みを整備していく各国の政策や現場の努力が促された。しかし、質の高い保育をどのように捉えるか、まだ結論の出ていない課題である。本論は、保育の質を考えるにあたり、参考となる資料として、アメリカ、マサチューセッツ州のハーバード大学内に設けられた保育施設における保育実践の一端を紹介する。

筆者は、ユニバーサルプリスクール（またはPreschool for all）を掲げてすべての児童の保育へのアクセスを拡充しているアメリカにおける幼児教育改革に関わる調査を重ねてきた。過去5年間、主にカリフォルニア州とマサチューセッツ州の調査を重ねてきたが、州の教育局を介して見学させていただいたのは、州がてこ入れする保育施設で、そこでは州の政策が保育実践に強く影響を及ぼしていた。地域的には、貧困地

域やマイノリティが集中する地域で、危機的な問題を抱える児童の多い保育施設を中心としていた。アメリカが不利な条件下にある児童の教育に力を入れる様子を調査することができた。しかし、アメリカには保育理念の異なる多様な私立の保育施設が多数存在する。今回、経済的に豊かな地域における私立の保育施設にも目を向け、ハーバード大学内に複数存在する保育施設に目を向けた。

ハーバード大学の保育施設を調査対象とした理由は、第1に、国際的に先進的な研究と情報交換が行われ、国内外の英知が集められやすい。第2に、大学のキャンパスそのものがひとつの町のような豊かなコミュニティを形成し、治安と環境面で安心感がある。第3に、世界中から優秀な人材が集まる大学であるだけに、保育施設に通う児童のバックグラウンドは文化、言語、価値観において多様であるし、その後もアメリカにとどまるとは限らない児童達を対象としていることである。多様な児童を抱え、幼稚園、小学校への移行も含め大事にされている保育の視点は何なのか、グローバル化する社会における

保育の質を考える上で参考になる点があるのではないだろうか。本報告では、マサチューセッツ州における保育施設の質評価基準にも触れながら、ハーバード大学のソールジャーズフィールドパーク・チルドレンズセンターの実践を報告する。2012年、5月25日、同センターを訪問し、アシスタントセンターディレクターであるデボラ・フォスター（Debra Foster）氏にインタビューした。フォスター氏は、幼児教育者として16年のキャリアを有し、現職になって3年になる。

なお、本報告は保育実践を考える上での参考資料として同センターについて知り得たままを報告するものであり、特別な視点による分析・評価、そして結論などを意図するものではない。また、インタビューでは保育者はteacherと呼ばれていたため、本報告では「教師」と呼ぶ。

1. 学びを支える保育施設

(1). キャンパス内の保育施設の概要

ハーバード大学の卒業証書授与式では、幼い子どもと手をつないだ女子学生や赤ちゃんを抱いた男子学生が卒業証書を受け取るために演台に上がっていく姿が見られた。そのたびに幼児を抱えながらの健闘をたたえ、会場から明るい歓声と拍手が沸き起こる。年によっても異なるが、筆者が目撃した2012年度のビジネススクールの卒業証書授与式ではもはや特別めずらしい光景でもなさそうであった。ハーバード大学内の保育施設は、最初はこのように子連れで学ぶ学生や大学職員のニーズに答えるために設置された。しかし、その後、卒業生や何らかの形でハーバードに関わる人々の子弟にも対象が広がり、現在では、ハーバード関係者が優先であるが、地域の人々の子弟も受け入れている。保

護者向けのハンドブックには、おおよそ85%が何らかの形でハーバード関係者で、15%はより広いボストンのコミュニティの人々の子弟だと記載されている¹⁾。

2011年度5月の時点でハーバード大学キャンパス内の保育施設は6カ所ある²⁾。主に3歳から5歳までの児童を受け入れ対象としているが、1カ所だけ2歳から受け入れている。

アメリカの保育施設は終日受け入れるフルタイム、半日受け入れるパートタイムなど、保護者のニーズに合わせて複数の保育時間を設定している。ハーバード大学の保育施設でも保護者のニーズに応じて、「フルタイム」、「午前または午後の半日」、さらに「3/4日」、「週に2日」、「週に3日」など施設ごとに利用者のニーズに応じた多様な選択肢が設定されている。一日の保育開始時間と終了時間も施設によって異なり、フルタイムの場合でも、8am-6pm（10時間）、8:15am-5:30pm（9時間15分）、8:15am-5:45pm（9時間30分）と一定ではない。

保育料は、月額で示され、児童の年齢段階と保育時間で異なる。また、ハーバード大学のキャンパス内であるが、6カ所の保育施設の保育料はすべて異なる。フルタイムの乳児の場合、最低1,251ドル（112,590円：1ドル90円で換算）から最高2,550ドル、就学前で最低825ドルから最高1,610ドルまで幅があるが、共通して言えることは、日本の保育施設に比べ極めて高い。日本の場合、終日保育をする保育所の保育料を2012年の保育白書に掲載された保育所の保育料表で見ると、最も高い3歳未満児、第8階層で、函館市の約101,920円が最高である³⁾。

(2). ソールジャーズフィールドパーク・チルドレンズセンター

本調査では、ビジネススクールに隣接して設

置されているソールジャーズフィールドパーク・チルドレンズ・センター（Soldiers Field Park Children's Center:以後「SFPC センター」または「センター」と省略する）を訪問した⁴⁾。

①センターの概要

ア) 歴史

SFPC センターは1976年6月に開設され、1977年の春に非営利組織として編成された。開設当初は6家族が利用する小さな施設であったが、現在は約80人の児童がフルタイム（約70%）またはパートタイム（約30%）で登録されている。現在の教室風景を写真1～4に掲載した。

マサチューセッツ州では2005年7月に全米初の幼児教育に特化した州当局が誕生した。同当

局は、州内の幼児教育保育施設のライセンスを付与する権限を持ち、SFPC センターも同当局からライセンスを付与されている。州当局による一定の管轄下に置かれることになったが、補助金はほとんど受けず、経済面で私立としての自立性を維持している。

イ) 受け入れ対象児童

SFPC センターが受け入れているのは、2歳から5歳までの児童で、2歳から受け入れているのは、ハーバード大学キャンパス内の6カ所の保育施設のうち、SFPC センターのみである。受け入れ対象は、基本的には何らかの形でハーバード大学に関わる人々の子弟であるが（約80%から90%）、地元からも受け入れている。



写真1 <教室風景>



写真2 <くつろげるスペース>



写真3 <文字の教育>



写真4 <教室風景>

ハーバード大学が世界各国からの留学生が集まるキャンパスであるため、受け入れ児童の約 20% はインターナショナルである。フォスター氏によれば、訪問時の時点でセンターが受け入れている児童の国籍を列举すると、イスラエル、インド、トルコ、フランス、ロシア、レバノン、チリ、アルゼンチン、イタリア、ブルガリア、中国、韓国で、特定の文化圏に偏ることなく、かなり広い文化圏から集まっていることがわかる。センターでは、毎年、家族が 1 品持ち寄るインターナショナルポットラックディナーを開催し、児童と家族の交流の機会を設けている。

だが、これほど母語の異なる児童達が集まると、日常的なコミュニケーションや指導にはかなりの困難が伴うことが予想されるが、特別な対処方法があるのだろうか。この疑問に対し、回答はシンプルであった。児童達はとても速く言葉をピックアップする。入所後まもなく海外から来た児童達も英語を理解し、話すようになり、比較的スムーズにコミュニケーションが可能になるそうである。

ウ) 保育時間、教師と児童の比率

SFPC センターの保育時間、保育料、教師 1 人に対する児童数を表 1 に示した。センターはマサチューセッツ州の幼児教育局が設定する基準より高い水準で保育を実施していることに自信をもっている。教師 1 人に対する児童数は日本

の児童福祉施設最低基準（3 歳児 1：20、4 歳児 1：30）と比べても、2 歳以上の比率は極めて高い。きめ細やかな教育を可能とする人数の教育者が配置されていると言える。児童と教師の割合を低くすることは、コストが高くなることを意味し、経営を圧迫することにもなるが、教育的価値が優先されている。

保育時間は、1 週間に 5 日、午前 8 時から午後 6 時までのフルタイム、午前 8 時から午後 1 時までの 1/2 タイム、午前 8 時から午後 3 時までの 3/4 タイムがある。

日本で認定こども園が設置されるに際し、問題視されたことのひとつに、児童によって帰宅時間が異なることから生じる情緒の問題があった。センターでは、それぞれが異なる時間に帰宅することが通常のノーム（規範）となっており、特に問題は生じていないという。

エ) 特別な側面

日本の保育所では給食室があるのは通常であるが、アメリカでは通常ではなく、ハーバード大学内の 6 つの保育施設の中でも同センターのみがキッチン設備を有している（写真 5）。訪問時には、ちょうど温かいおやつが準備されていた。また、センター内に砂場とキャンパス道路を隔てた所にセンターのプレイグラウンド（写真 6）があるが、更に広いキャンパス内を教師と自由に散歩し、散策できる特権がある。筆者が訪問中も

表 1. 教師と児童の比率

乳児（2 か月～10 か月未満）	1：3	乳児 / よちよち歩き （10 か月～15 か月未満）	1：3
よちよち歩き 1 （15 か月～22 か月未満）	1：4	よちよち歩き 2（15 か月～29 か月）	1：4
よちよち歩き 3 （25 か月～46 か月）	1：6～7	プリスクール 1（34 か月～46 か月）	1：6～7
プリスクール 2（46 か月～5 歳）	1：6～7		

出典：Parents' Handbook, 2011-2012、p.3 より筆者作成

かわいい姿がキャンパス内で見られた。

②保護者に関われたガバナンス

保育の質は、教師と児童が直接かかわる部分だけで決まるものではなく、施設のガバナンスの在り方、とりわけ保護者の関わりも保育の質に影響する要素であるかもしれない。

ア) 組織構造

SFPC センターは非営利企業（non-profit corporation）で、理事会によって管理運営されている。理事会は、センターの監督責任があり、センターのディレクター雇用、センターの方針設定、センターに関する最終的決定を行う。理事会は7人の保護者、3人のスタッフ、ハーバード大学代表者2名、ハーバード大学ワークライフバランスリソース室の代表1名、センターのディレクター、アシスタントディレクター、そしてコミュニティからの代表1名で構成されている。7名の保護者のうち、3、4人は毎年選挙で選ばれ、任期は2年である。3人のスタッフのうち1人か2人は毎年、選ばれる。理事会は毎月、定期的開催され、年に一回、9月に総会（Parents Night: 保護者のタベ）が開催されている。細則はディレクターのオフィスで閲覧できること、また毎回の議事録が教室の掲示板上に掲

示されることも保護者に知らされている。

理事会の下、理事会のメンバーが議長をする次の委員会がある。

予算委員会：センターの財務を監督し、サブコミュニティは保育料、給与、その他の支出などについて勧告する。リソースサポートとファンドレイジング委員会：保育料だけで賄えない重要な資金調達のための活動を企画・実施する。教育方針・コミュニケーション委員会：センターの教育理念（educational philosophy）に関わる方針及び内部コミュニケーションに責任を有し、保護者のリソースとなる教育ガイドなども編集する。保護者委員会：各クラスの保護者代表で構成され、クラスルームのイベントや緊急連絡網、スタッフへの贈り物、センター全体の活動、保護者調査、ピクニック、インターナショナルポットラックディナーなどを企画・実施する。人事方針委員会：スタッフに関する方針の検討、スタッフの苦情処理に関するマニュアルなどに関する事柄に責任を有する。特別企画委員会：(a) 外部とのコミュニケーション、(b) 他の委員会の守備範囲外にある活動、(c) 委員会間の調整を必要とする活動のいずれかを含む臨時プロジェクトに関わる。



写真5 <キッチン>



写真6 <キャンパスの中のプレイグラウンドと遊具>

イ) ガバナンスに保護者の才能を生かす

このような施設のガバナンスが保護者に知らされているだけでなく、これらの委員会に関心のある保護者には委員会への参加が認められている。とりわけ、保護者が特別な関心領域や才能があれば、積極的に園の活動や運営に生かしていきたいという姿勢が保護者向けの案内には示されている。

2. 教育思想と児童の学びへのアプローチ

(1). 様々な教育思想の統合: センターにおける教育は、誰か特定の教育思想家の理論に基づいているのか質問した。センターでは、特定の幼児教育思想に基づくのではなく、様々な思想家の理論を統合しながら、実践内容の質をあげるようにしている。たとえば、ピアジェ、ヴィゴツキー、ボールビーなどの理論に基づいている。また、センターが基本方針とするのは、ホールチャイルド (whole child) を育てるということ、つまり全人教育を基本としている。さらに、各教師も自分なりの教育思想を持っている。それらの思想もセンターの基本方針と統合され、各教師の独自性もある程度尊重されている。

(2). カリキュラムのスタンダード: アメリカではオバマ大統領が「バーを高くする」、つまり、アチーブメントの期待水準を高める政策をとっており、児童生徒の学びを測定し、結果志向が強まっている。この傾向は、3歳頃からの幼児教育にまで波及している。その波の中で、本センターは児童の学びについてどのようなアプローチをとっているのだろうか。インタビューでは、以下の具体的な回答を得た。

マサチューセッツ州のカリキュラムフレームワークには従わなければならない部分はある。

特にライセンス取得上、求められる基準には従っている。しかし、カリキュラムスタンダードについては、このセンター独自のスタンダードがある。個々の子どものニーズに合わせて調整する (原語は tailor)。

(3). アカデミック志向の保護者の理解をいかに

促すか: ハーバードのキャンパス自体がアカデミックな環境である。ゴール達成志向が強い保護者の中には、字の読み書きなどアカデミックなことをセンターでより強化することを強く言う人もある。そのため、センターの教師も苦悶する時がある。保護者には、このセンターで児童が経験していることは、認知的能力の獲得とひとしく子どもにとって重要であることを理解してもらうようにする。教室で児童に起こっている様々なことが、どのように児童の多様なスキルの発達に関わってくるか保護者に語ることを通して、保護者に子どもの学びを説明する。1年に2回、ポートフォリオを作成し、センターにおける児童の活動とそれを通じた児童の成長と学びを保護者に伝える。ポートフォリオの中で、教員は個々の児童に何が起ったか、児童間の関わり合い、子ども同士がどのように教え合っているか、児童がどのように問題解決をしているか、お互いにどのように交渉しているかなど、このセンターでの児童の活動が教育であり、学びであることを記述している。ポートフォリオの作成には、教員のかなりの時間が注がれる。

(4). センターの中心的関心事: カリキュラムの中

には、読み書きなども含まれるが、それはセンターの中心的な関心事ではない。センターのゴールはあくまで子どもの発達や興味関心に基づいた経験をサポートすることにある。センターが力点を置くのは、子どもの興味関心をサ

ポートし、児童をチャレンジングな経験にさらしていくことである。もちろん、無理に押し付けることはしない。今、センターには2歳児で読み書きにとっても関心を示す子がいる。その一方で、4歳児であまり関心を示していない子もいる。しかし、この4歳児は、別のことに興味を持っていて、そのことが得意である。この興味関心こそセンターがサポートしてやりたいことである。児童の自己肯定的感と自信を高めることが狙いである。

センターにおけるティーチングがあらゆるタイプの学びに対応できるように、クラスルームの構造を構成するようにしている。子ども達は通常、体を使った活動が好きだが、みんなで囲んで本を読んだりすることもある。しかし、他のタイプの活動とのバランスがとれるように配慮している。

3. ポートフォリオとアセスメント基準

(1). ポートフォリオ作成のための児童の観察記録

アメリカの保育施設では一般的に児童のポートフォリオが作成されている。SFPCセンターでも、児童一人一人の活動状況を記録したポートフォリオが教師によって作成される。ポートフォリオは、単に児童の活動状況を記録するものではなく、発達の状態をチェックし、児童をよく観察した上で記録されるものでもあり、発達のアセスメントも含まれていると言っても良い。すでにマサチューセッツ州の質改善の基準ではスタッフはスクリーニング手段と形成的アセスメントの研修を受けていなければならない、児童の観察を通した記録が行われる。インタビューで教師がどのように児童を観察し、記録するのか質問した。個人情報であるため、児童について記録されたポートフォリオの写真を撮

ることはできなかった。

SFPCセンターでは、一年間、月々に何があったかをポートフォリオとして写真や記述で記録している。ポートフォリオは月単位で記録される。最初にサマリーがあり、その後、言語や運動能力などの領域別に児童のその月の発達の様子が写真や文章で記録される。担当する教師によって作成の仕方は細かな点で異なるが、全くルールがないわけではない。児童の発達の状況について、2か月に一度、個々の児童についてフォーマルなアセスメントが実施される。たとえば9月にアセスメントが実施され、10月にはサマリーがポートフォリオに記入される。ポートフォリオを作成する教師全員がこの共通のアセスメント基準に基づいて児童の観察と評価を実施し、その記録がポートフォリオの記録になっていくため、教師の興味本位の児童記録とはならない。

(2). フォーマルなアセスメントの基準

アセスメントでは、ダイアンブリッカー (Diane Bricker) 等が作成した基準と書式⁵⁾に基づいて乳幼児の観察と記録が取られる。児童観察データ記録用紙は「誕生から3歳まで」と「3歳から6歳まで」の2種類に分かれ、「3歳から6歳まで」の中を見ると、大きく6つの領域から成る。それらは、2種類の運動領域 (Fine Motor Area, Gross Motor Area)、適応 (Adaptive Area)、認知 (Cognitive Area)、ソーシャルコミュニケーション (Social-Communication Area)、社会的 (Social Area) 領域である。日本で子どもの姿を見る際の5領域 (健康、言葉、表現、人間関係、環境) と異なることを指摘しておく。

これらの領域の中で、「適応」の領域は、日本における健康の領域と重なる部分が多い。しかし、発達の姿を見る視点は細かい。たとえば、

表 2. 「適応領域」の食事時間の観察基準（3歳から6歳）

A. 食事時間
1. 多様な食べ物を適切な食事の器具を使い、ほとんどこぼさないで食べたり飲んだりする。
1.1 適切な量の食べ物を口に入れ、口を閉じて噛み、次の食べ物を口に入れるまでに飲みこむ。
1.2 適切な量の水分を摂取し、カップを元にもどす。
1.3 多様な素材の食べ物を食べる。
1.4 多様なタイプの食べ物を選び、食べる。
1.5 食事の器具を使って食べる。
2. 食事の準備をし、配膳する。
2.1 食べ物を食べるために準備する。
2.2 食べ物をスプレッド（spread）するのにナイフを使用する。
2.3 飲み物を様々な容器に注ぐ。
2.4 食事の器具を使って食べ物を配る。

出典：“AEPS Child Observation Data Recording Form II Three to Six Years,” in Diane Bricker ed., Assessment, Evaluation, and Programming System for Infants and Children, Second Edition, Paul H. Brookes Publishing Co., Inc., 2002.

「食事」の場合、大きくは2つの項目があり、それらの中に合計9つの項目があり（表2）、1.1のように食べ方まで細かく観察しなければならない。

観察結果は0, 1, 2のスコアで示される。0は基準を満たしていない、1は時々基準を満たす、2は常に基準を満たすである。また、援助が提供された場合や児童の行動が途中で遮られたなどについても、記号で付記するようになっている。

(3). マサチューセッツ州における質評価・改善システムのスタンダード

ここで、アセスメントと関わり、州の基準について紹介しておく。アメリカでは全州で幼児教育の質改善に向け、保育のスタンダードが州政府によって設定されつつある。マサチューセッツ州では、幼児保育・教育局が「質評価と改善システム（Quality Rating and Improvement System：QRIS）」と名付けられたスタンダードを設定している。最終版の前の暫定版には、「スタンダードとは、ステークホルダー、政策立

案者、保護者が高い質について共通に合意した定義である」との理解が述べられている⁶⁾。

QRIS スタンダードは、5つのカテゴリーとそのサブカテゴリーから構成される。日本語訳と原語とは微妙な意味あいの違いがあるため、言語も（ ）内に記述する（表3）。

スタンダードは、QRIS 基準（rating）に対応するレベルで示され、レベルは一連のかたまり（block）として構築されている。たとえば、カテゴリー「カリキュラムと学習」のサブカテゴリーでは、4段階のレベルがあり、各段階における測定に用いられる内容や手段などが示されている。さらに、それらの基準とヘッドスタートの基準との対応も記されている。幼児教育の様々なプログラムは、レベル1から段階的に進むことが求められ、レベル1におけるすべての基準（criteria）を満たした上で、レベル2の段階に進むことができる。本資料では、児童のポートフォリオ作成と深く関わる「アセスメント」を含む基準を紹介する（表4）。

表 3. QRIS の 5 つのカテゴリーとサブカテゴリー

1. カリキュラムと学習 (Curriculum and Learning)
1A カリキュラム、アセスメント、多様性 (Curriculum, Assessment, and Diversity)
1B 教員と児童の関係と関わり (Teacher Child Relationships and Interactions)
2. 安全で健康的な屋内、屋外の環境 (Safe, Healthy Indoor and Outdoor Environments)
3. 保育者の資格と専門職開発 (Workforce Qualifications and Professional Development)
3A 定められたプログラムアドミニストレーターの資格と専門職開発
3B プログラムスタッフの資格と専門職開発
4. 家族と地域の参加 (Family and Community Engagement)
5. リーダーシップ、マネジジメント、アドミニストレーション (Leadership, Management and Administration)
5A リーダーシップ、マネジジメント、アドミニストレーション
5B 監督 (Supervision)

出典：Massachusetts Department of Early Education and Care, Center and School Based QRIS Standards, 2010.12.14.
より筆者作成

表 4. マサチューセッツ州・センター及びスクールベースの質評価・改善システムのスタンダード：カテゴリー (カリキュラムと学び：1A. カリキュラム、アセスメント、多様性)

レベル	修正されたスタンダード
レベル 1	ライセンス規程の要件を満たすまたはライセンスが免除されている、そして EEC * のライセンス要件を満たしている。
レベル 2	レベル 1 の要件を満たす プラス 教育者はカリキュラム、スクリーニングの手段、そして形成的アセスメントに関する研修を修了している。 教材は教室の児童の言語や文化、彼らのコミュニティを反映し、社会の多様性を代表している。
レベル 3	レベル 2 の要件を満たす プラス スタッフは児童のプログレスレポートに保護者の意見を取り入れている。 すべての発達領域にわたる児童の目標を設定するために、プログラムはスクリーニングの手段、プログレスレポート、形成的アセスメント、観察を通して得られた情報を用いている。 スタッフはカリキュラムにおいてフォーマルな専門的研修を受けている。 マサチューセッツ州プリスクールラーニングスタンダードまたは乳児とよちよち歩きの幼児のラーニングスタンダードを用いている。 児童の進歩を記録している。多様な言語や文化背景の児童、そして第 2 外国語の獲得に関わっている。 スタッフは英語または児童が使用する言語において児童のモデルになるような言語能力とリテラシースキルを有している。
レベル 4	レベル 3 の要件を満たす プラス プログラムは「マサチューセッツ・プリスクールラーニングスタンダード・ガイドライン」と「乳児とよちよち歩きの幼児のラーニングガイドライン」にのっとったカリキュラムを使用している。 プログラムはカリキュラム計画を知らせるために、プログレスレポート、適切なスクリーニングの手段、形成的アセスメント、観察を通して得られた情報を用いている。また、発達領域における各児童のプログレスをモニターするためにそれらの結果を活用し、プログラムの意志決定を周知している (例えば、カリキュラム内容、スタッフの改善戦略、専門性の開発)。

* EEC：マサチューセッツ州幼児教育保育局

出典：Massachusetts Department of Early Education and Care, Center and School Based QRIS Standards, 2010. p.3-5 より一部を訳出した。

5. 多様な文化背景の児童達のトランジション（移行）

(1). 幼稚園へのトランジションに備える

日本では小学校へのスムーズな移行と適応のために、保幼小連携の取り組みが様々行われているが、保護者と一緒に世界各国からやってきた児童達は、保護者がハーバード大学での勉学を終えると、保護者と一緒に母国へ帰っていく可能性が高い。そこではアメリカと異なる教育制度が待っている。20%近く居る異なる文化背景を持つ児童達のトランジションにSFPCセンターはどのように備えるのだろうか。

ちなみに、アメリカの教育制度では、幼児期のトランジションと言え、主に幼稚園前から幼稚園への移行であることを述べておかねばならない。幼稚園は通常、小学校に付設され、カリキュラムも従来はK-12として、幼稚園から12学年まで連続するカリキュラムの枠組が形成されてきた。そのため、幼児期の教育から小学校への移行は、幼稚園から小学校1年生への移行というより、幼稚園前の段階から幼稚園へのトランジションとしてとらえられる場合が多い。カリキュラムに関しては、マサチューセッツ州では既に幼稚園前のプリKから12学年までの教育内容を一貫化する方向にあり、2011年3月には、プリK（幼稚園前）から12学年までの算数のカリキュラムの枠組みがマサチューセッツ州で公表された。しかし、物理的には、児童がプリKから幼稚園への異なる環境へと移っていかなければならない点は変わらない。

センターでは、他の5つのセンターと連携し、トランジションについて頻繁に話し合っている。センターでの学びが幼稚園入園後の学びとつながっていることを確実にするため、幼稚園が入園してくる児童に期待することを調査して

いる。調査のため幼稚園も訪問する。幼稚園は公立も私立も訪問する。センターでの取り組みとして、まず第1に幼稚園に移ってもあわてないように、センターでも幼稚園と同じような環境を作り、幼稚園に居るかのように見え、また感じられるようにしている。第2に様々な活動を行っている。それらの活動の主眼は、児童にやがて大きな変化が訪れることを理解させ、それに対する準備はできていることを分からせることである。このセンターで培った人と関わる力（交渉力）やコミュニケーションスキルで新たな友達と関わっていけること、異なる場所で、異なる子ども達とでも、ここで経験した様々な事ができることを分からせる。そして、変化がどんな気持ちをもたらすか、何が同じで何が違っているかなどを考えさせ、より大きな環境に対応することにも取り組んでいる。

センターでは、文字や数字など、アカデミックな学びへの準備も行われているが、それらが中心ではなく、通園のための移動や直面する様々な変化への対応力が自分に備わっているという自覚と自信を持たせることに力点があるようである。この第2の取り組みは、児童がどのような国に行こうと、変化に対応し、多様な人々と交わって生きていける力と精神性の基礎を培っていると言えるのではないだろうか。

(2). 重視される能力

幼稚園で成功するために重視する側面は何か聞いた。まず述べられたのが問題解決能力、自立的に問いを発する力、情報について考えるスキルの3つであった。さらに、集団に参加し、友人をつくることなど社会的側面、コミュニケーション能力などが挙げられた。

(3). 失われてはならない児童のファウンデーション (全体基盤)

アメリカにおける幼児教育で大事なことは何だろうかと質問したところ、次のような答えが返ってきた。

すべての児童が一人ではなく、家族、文化などの環境によって児童の全体像が形成されている。それらがスクール（幼児教育施設）の環境によって失われてはならない。児童が何者であるかはとても大事であり、特に乳幼児のケアはとても個別である。親の文化や信仰、そして育て方などを尊重されることが重要で、保護者との会話が大事である。彼らが何をしようと成功するように、このファウンデーションは祝福 (celebrate) され、サポートされなければならない。

児童のファウンデーションの尊重が何をするにしても児童の成功に関わるとことと認識されている点、そしてファウンデーションが「祝福」されなければならないという表現が使われている事、これらの認識は多文化社会アメリカにおいて長年の人種間の葛藤と幼児教育の研究の末に教師の確信となってきたかに思える。

児童の文化的バックグラウンドへの配慮は、先に触れたマサチューセッツ州の幼児教育施設の質評価・改善システムの基準でも記載されており、アメリカにおける保育の質を考える時、決して見逃してはならない要素である。

おわりに

分析的報告ではないが、多様な観点から保育の質を考える一助になればと考える。インタビューに快く応じてくださったフォスター氏に謝意を表する。

注

- 1) Soldiers Field Park Children's Center, Parents' Handbook, 2011-2012, p.2. 保護者用のハンドブックには入園方法だけでなく、組織やガバナンス、問題解決のプロセスなど A4 サイズ、18 頁にわたり細かな字で情報が提供されている。
- 2) 6 か所は次の通り。Botanic Gardens Children's Center, Oxford Street Daycare Cooperative, Harvard Yard Child Care Center, Peabody Terrace Children's Center, Radcliffe Child Care Centers, Inc., Soldiers Field Park Children's Center.
- 3) 全国保育団体連絡会・保育研究所編、『保育白書 2012』、2012、ひとなる書房、p.298。
- 4) センターの概要については、センターのホームページで見ることができる。
- 5) Diane Bricker, Betty Capt, Kristie Pretti-Fontczak, Assessment, Evaluation, and Programming System for Infants and Children, second edition: Test Birth to Three Years and Three to Six Years, Volume 2, 2002. 児童のアセスメントを適切に実施するには、本著に加え、Volume 1 も読まなければならない。
- 6) Massachusetts Department of Early Education and Care, Center and School Based QRIS Standards, Provisional Version, p.2. 2010 年 2 月 17 日付の暫定版は 42 頁にわたるものであったが、2010 年 12 月 14 日に出た最終版は、最初のイントラダクションは簡潔になり、サブカテゴリーが整理され、30 頁に縮小されている。

